

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3036 号 2016.5.22 発行

### <熊本地震>子供の心、深い傷…乱暴な言葉、赤ちゃん返りも

毎日新聞 2016年5月21日

「おい、クソジジイ」。熊本県益城（ましき）町の避難所の小学生の口から、次々ときつい言葉が飛び出す。園児は赤ちゃん返りし、いつまでたっても泣きやまない。震度7の激震を2度経験した子供たち。避難所で約5時間一緒に過ごし、深い心の傷を見つめた。【福岡賢正】

避難所には約20人の子供がいた。中3女子生徒に背負われた小4女兒が、私（記者）に延々と攻撃的な言葉をぶつける。「おい、クソジジイ。お前、えらそうだな。えらそうに、このオッサン」。小3男児も体が触れただけなのに「おい、足蹴るなよな。コラ」と突っかかる。

児童虐待の取材をした際に接した被虐待児が里親などに示す「試し行動」とそっくりだ。心に深い傷を負って不安や恐怖を抱え込んだ子が、大人がどこまで許容するのかを試す無意識の行動だ。

「ごめんごめん、痛かったやろ」と言いつつ、あまり相手にせず、女子生徒に知人について書かれた新聞記事を見せていると、「ジイサン、ジイサン、オジサン、オジイサン。コラ、俺にも見せろ」と小3男児がわめく。

近くに座る高1女子生徒の膝の上に幼稚園年中の男児がいた。和やかだったが、年中男児は何かを要求し、女子生徒に断られると、地面に突っ伏して泣き出した。10分たっても泣きやまない。典型的な赤ちゃん返りだ。

年中男児が怒ってぶちまけた遊び道具を私が片付けようとする、中1の男子生徒が「いいよ。自分で片付けさせる」と止める。

この男子生徒に「この1カ月、どうだった」と尋ねる。「まっ、いろいろ大変ですよ。でも俺は大人だから。友達と電話で『お前、生きてる？』みたいな。余裕余裕。楽勝楽勝。懸命に背伸びしているように見える。

攻撃的な言動の2人の小学生について、それぞれの母親に話を聞くと、「みんなと一緒にだと偉そうにしてるけど、夜になると怖がって。絶対1人になれないし、トイレも1人じゃ行けない」と口をそろえる。地震で変わってしまったようだ。

2人の母親のうち1人は、自宅が片付き、避難所を出られるのだが、ここで過ごす。子供が自宅を怖がるからだ。もう1人は最近家に帰ったが、昼間は避難所にいる。「夜はあの子、毛布かぶって縮こまって寝てます」

2人の夫は一方が単身赴任中、もう一方が4月16日の本震の翌日から休みなしだ。2人は「生活するのに稼いでもらわんといかんから」と笑った。

◇周りは余裕持って

トラウマを負った子のケアに詳しい井上登生（なりお）医師（発達行動小児科学）の話しに恐怖を抱えると、自分を勇気づけるため攻撃的な言動をよく取るし、赤ちゃん返りや逆に頑張りすぎる子も。周りの大人が余裕を持って、大丈夫だよというメッセージを送り続けられれば、時間はかかるが次第に症状は治まっていく。

日本児童青年精神医学会が作成した対応マニュアルをホームページ (<http://child-adolesc.jp/notice/2016-04-18/>) で公開中なので、活用してほしい。

#### 高額メダカ300匹盗難か みやき町 1匹2千~1万円前後で取引

佐賀新聞 2016年05月21日

観賞用のメダカ約300匹が姿を消した水槽=三養基郡みやき町の「コロニーみやき」

三養基郡みやき町の障害者自立支援施設「コロニーみやき」で、販売目的で飼育していた観賞用メダカ約300匹が17日夕から18日朝にかけて姿を消した。水槽の中や周辺に死骸はなく、施設側は盗まれた可能性が高いとみている。売り上げを利用者の工賃アップにつなげる計画だった関係者は落胆している。

姿を消したのは屋外で飼育していた生後約2年の親メダカで、体長3~4センチ。品種改良で色や模様があり、尾びれが長いものもいた。1匹2千~1万円前後で取引され、繁殖用にえりすぐり、日よけや囲いをした水槽で育てていた。

2014年から飼い始め、数が一時的に減ることはあったが問題視してこなかった。今回は数が多く、値が張るものばかりで、施設職員で飼育を担当している土屋俊一さん(45)は「転売か飼育目的の人が持ち去ったのかも」と指摘する。「本格的な販売事業に向けて、これから飛躍的に数を増やすつもりだった。メダカが好きな人に悪い人はいないと思っていたのに…」と肩を落としていた。

施設は鳥栖署に相談してパトロール強化を求める一方、鉄柵を設け、防犯カメラも設置する。



#### ノーリツが障害者就労支援 稲美町に事業所開設

神戸新聞 2016年5月21日

就労支援で始まった給湯器の分解作業=稲美町国安

知的障害者らの就労を支援するため、賃金を支払いながら職業訓練を行う「就労継続支援A型事業所 すまいるハーツ」が兵庫県稲美町国安のノーリツ土山工場に設立され、20日に開所披露式が開かれた。

給湯器大手で、障害者支援にも取り組む同社のグループ会社が設立した。知的障害者らと雇用契約を結ぶことで最低賃金を保障。時給800円で平日6時間半、主に、使用された給湯器の分解作業に従事する。分解後の金属などは販



売して収益を得る。雇用には期限はなく、技術などを身に付け、一般企業への就労が決まれば退所となる。

事業所は作業スペースや休憩室など計255平方メートル。4月1日に開所した。定員12人。現在は加古川、高砂、明石市などから男性8人、女性2人が通う。1日で給湯器約20台を分解している。

開所披露式には、関係者ら約40人が出席。すまいるハーツの竹中昌之社長は「努力を怠らず自分の強みをつくって、一般企業の戦力になれる社員を目指してほしい」と話していた。(伊丹昭史)

### ティーボール 香川中部養護学校5連覇

読売新聞 2016年05月21日

野球とソフトボールの入門編とされるスポーツ「ティーボール」の大会が坂出市林田町の林田運動公園で行われ、県内五つの養護学校や特別支援学校に通う知的障害者約110人が熱戦を繰り広げた。

毎年この時期に行われている。基本ルールは野球とほぼ同じだが、投手が投球する代わりに台の上にボールを置いて打者が打つ。

試合はトーナメント方式で、計6試合が行われた。長打を狙ったり、守備の隙を突いて鋭いゴロを放ったりして、各チームとも大量得点を重ねた。

決勝は県立香川中部養護学校（高松市）と県立香川西部養護学校（観音寺市）が対戦し、香川中部養護学校が26対8で圧勝。大会5連覇を果たした。

### 走れ！障害者アート 特別支援校バスにラッピングへ 支援学校の子どもたちの立体作品（上）（下）と、ラッピングバスのイメージ。背景も作品

東京新聞 2016年5月21日

都立特別支援学校のスクールバスを、子どもたちのアートでラッピングすることになった。車体を彩るのは、今年2月に初めて開かれたアートプロジェクト展に出品された絵画や工作、陶芸など。2020年東京五輪・パラリンピックに向け、都教育委員会は、障害者アートへの関心を高めたいとしている。

ラッピングに使われるのは50作品。知的障害や視覚障害、肢体不自由などの子どもたちが創作した439点から、東京芸術大教授らが選んだ。

スクールバス約340台のうち、十数台の車体に作品を印刷したシートを貼る。夏休み明けから来年3月まで、子どもたちが通う学校の近くや、人通りの多いコースを走らせる。

肢体不自由の生徒4人の作品が選ばれた都立あきる野学園（あきる野市）の山本和弘校長は「私たちが考えつかないような、子どもたちの感性を見てもらいたい。作品を発表する機会の少ない子どもたちの励みにもなる」と話している。（松村裕子）



### ぬくもり感じる 子育てギフト 多摩産材のおもちゃなど 八王子市、面談の妊婦に

東京新聞 2016年5月21日

木のおもちゃ、おくるみ、絵本が1種類ずつのセットで贈られる「はち★ベビギフト」

八王子市は、妊娠して保健師らと面談した女性に、多摩産材のおもちゃと国産ガーゼで作ったおくるみ、絵本を贈る「はち★ベビギフト」を始めた。市内3カ所の保健福祉センターを拠点に、妊娠から就学前の子育てまでを支援するきっかけとして、八王子らしいギフトを用意した。都の補助事業を活用した取り組みで、多摩地区の自治体



にも広がっている。（村松権主磨）

おもちゃはヒノキなどを原材料とし、つるつるした手触りが特徴。丸、四角、三角のパーツのセットや、車輪のついたウサギ、赤ちゃんが握れる麒麟のパズルなど七種類がある。織物の街の八王子らしく、手織りの巾着入り。いずれも市内の工房で、障害者が手作



りしている。

ガーゼ三枚を重ねた「八王子くるみ」は、市の花ヤマユリなどの絵をプリント。赤ちゃんのバスタオルや、授乳時に母親がまとうケープにも使える。絵本は、命の大切さをテーマにした三冊が選ばれた。窓口で渡される布の袋に、おもちゃ、おくるみ、絵本が一種類ずつ入っている。おもちゃと絵本は選べない。

対象となるのは、今年一月以降、市役所や地域の事務所、保健福祉センターに妊娠を届け出て、母子健康手帳を交付された女性。保健福祉センターで十五分ほどの面談を受けるとギフトが贈られる。出産や子育ての相談窓口となるセンターの電話番号、担当する保健師の名前を書いたカードも渡される。

家庭の状況や健康状態を把握し、支援が必要な場合、受けられる行政サービスの紹介などを。大横保健福祉センター（大横町）の富山佳子館長は「子育てをする親は孤立しがち。行政が伴走者となり、社会で支援するというメッセージを伝えたい」と話す。

妊娠期から就学前までを支援する自治体の取り組みは、フィンランドの「ネウボラ」という制度がモデル。ネウボラは「アドバイスの場」の意味。都は二〇一五年度、東京版ネウボラとなる事業を打ち出した。市区町村が「育児パッケージ」として子育て用品などを贈ると、一人当たり一万円を補助している。

多摩地区では、東大和市と瑞穂町が一五年度に開始。一六年度に入り、八王子のほか東村山、青梅の各市などが始め、あきる野市は五月末の配布開始に向けて準備中。三鷹市と町田市は、おもちゃや子ども用品などに交換できる一万円分の商品券を贈っている。

#### 「市民後見人」育成に力 尾張東部、登録数増へ研修 中日新聞 2016年5月21日 新信弁護士（右）の講演に耳を傾ける研修参加者たち＝日進市内で



認知症や障害で意思決定が難しい人をサポートする「成年後見制度」の需要が、尾張東部でも高まっている。進む高齢化を受け、日進市など五市一町でつくる尾張東部成年後見センター（同市）は、専門家だけでなく市民にも後見人を担ってもらおうと、市民後見人の育成に力を入れている。

「後見人は個人情報を知り得る立場にあるが、『個人情報だから』といって、虐待被害の通報な

どを怠ることがあってはいけない」

日進市で十八日に開かれた市民後見人の養成研修で、新信（しんのぶ）聡弁護士（名古屋市中区）が個人情報の取り扱いや相続問題について講演した。研修には福祉関係者や主婦ら二十四人が参加し、熱心に耳を傾けた。

成年後見は、判断能力が十分でない人に代わり、後見人が預貯金の管理や福祉施設の入所契約などをし、本人の暮らしを守る制度。親族が後見人を務めるケースが大半だが、身寄りのない高齢者の場合、弁護士ら専門職やセンターが後見人を務める。

日進、瀬戸、尾張旭、豊明、長久手市、東郷町の五市一町でつくるセンターでは現在、約五十人の後見人を引き受けている。一人暮らしの高齢者が増えていることもあり、センターが発足した二〇一一年の十倍に増え、後見人の受け皿の拡大は急務となっている。

一月にセンターが始めた研修では、二十六人が講演やグループワークを通じ、福祉や法律の基礎知識を学んでいる。四十時間の実務研修を終えた参加者には、選考を経た上で「市民後見人バンク」に登録してもらおう。一方で、専門家でない市民後見人をどう支えるかという課題もある。

日進市の主婦（51）は、障害のある子どもをきっかけに参加したが、戸惑いが隠せない。「子どももお世話になる制度と思い参加したが、専門知識が難しく責任も重い。後見

人に選任されるまでのハードルは高いと感じた」と指摘する。

実際に市民後見人に選任されると、センターが監督人として支援する。住田敦子センター長は「市民後見人には、高齢者や障害者に近い存在として寄り添ってもらうことを期待している。専門職でも対応を迷うことがある分野なので、センターがしっかり後押ししていきたい」と話している。（森若奈）

### 【中国トンデモ事件簿】12歳女兒が性的暴行を受けた末に性病感染 16歳少女が妊娠姿を自撮り 父母不在の「留守児童」の闇深く…

産経新聞 2016年5月21日

16歳少女が自撮りしたとされる写真（中国・法制晩報の微博アカウントから）



中国江西省南昌県で、12歳の女子生徒が学校内で長期間にわたって性的暴行を受け、性病に感染する事件が起きた。一方、河南省許昌県では16歳になったばかりの少女が妊娠姿を自撮りしてネット上に投稿し、議論を呼んでいる。いずれも出稼ぎなどに出た両親と離れて暮らす「留守児童」とみられる。留守児童の多くは祖父母ら親族が面倒をみているが、保護能力に問題があるケースも多く、犯罪や事故、児童虐待に巻き込まれる子供たちが後を絶たない。

中国のニュースサイト「澎湃新聞」によると、性的暴行を受けた女子生徒の父母は事件当時、出稼ぎに出ており、被害者は祖父母と生活していた。事件の舞台が小学校か中学校かは明らかではないが、工務を担当するため校内で生活していた58歳の男が長期間、複数回にわたって女子生徒を暴行、性病に感染させていた。

度重なる暴行のため女子生徒は今後不妊となる可能性もあるという。精神的なショックが大きく、事件後に何度も自殺を図ったとされる。

今年2月の春節に両親が帰郷した際、女子生徒の様子がおかしかったことから問いただしたところ、被害を打ち明けた。地元の警察当局によると、容疑者の男はすでに逮捕され、取り調べを受けているという。

報道を受けてネット上では「いつになったら留守児童の悲劇は繰り返されなくなるのか?」「留守児童は頼るものがない孤児だ」といった声が相次いだ。

留守児童をめぐっては今年1月、湖南省耒陽市の住宅で2人暮らしをしていた祖母と1歳10カ月の孫娘が家の中で死亡しているのが見つかった。両親は出稼ぎ中で、面倒を見ていた祖母が急病で死亡し幼児は餓死したとみられる。

昨年6月には貴州省畢節市で、両親が出稼ぎなどでネグレクト（育児放棄）状態に置かれていた13～5歳のきょうだい4人が農薬を飲んで自殺する事件もあった。

中国では子供の5人に1人にあたる約6千万人が親から“置き去り”にされた留守児童との統計もある。留守児童が大量に生まれる背景には農業収入だけでは生活できない農村の貧困と、出稼ぎの「農民工」が都市に欠かせない安価な労働力となっている経済構造、都市と農村を厳格に区別する戸籍制度などがある。

留守児童は両親がいないために通常の子供よりも独立心が強い傾向にあるとの分析もあるが、未熟な子供たちが自活を強いられることで、犯罪に巻き込まれるケース以外にもさまざまなゆがみが生じている。

4月24日、中国紙「法制晩報」の微博（ウェイボ）アカウントに16歳の少女が妊娠した自分の姿を撮影した写真が投稿され、波紋を呼んだ。投稿などによるとおなかの子供の父親は17歳の少年。中国の法律では結婚できるのは男性が22歳、女性は20歳からだが、2人は「結婚」しているという。

ネット上では「よく親が許したな」などといった声が多く寄せられたが、少女の投稿に

よると、生まれてから父母と会ったことがなく、高齢の祖父母に育てられたという。両親は出稼ぎなどを理由に子供を祖父母に預けていたようだ。

### 児童福祉施設職員を懲戒免職 千葉

産経新聞 2016年5月21日

県は20日、生活指導などを担当した当時17歳の少女に昨年11月にみだらな行為をしたとして、児童福祉法違反容疑で先月県警に逮捕された、児童福祉施設「県生実学校」（千葉市中央区）児童自立支援専門員の男性職員（35）を懲戒免職処分とした。

県などによると、八日市場簡易裁判所は先月26日に県青少年健全育成条例違反罪で元職員に罰金50万円の略式命令を出し、元職員は即日納付した。

### 仙台地検、虐待児聴取で指針

共同通信 2016年5月21日

虐待や性的被害を受けた子どもに被害内容を確認する聴き取りについて、仙台地検が、つらい体験を話すことによる子どもの心理負担を軽減するための手法を示した内部向けの指針を作成したことが21日、関係者への取材で分かった。小児科医による診察の導入、関係機関の連携や聴取回数の制限のほか、絵や人形を使った面接法も盛り込み、運用を始めている。

全国の一部地域では厚生労働省や最高検の通知に基づき、警察と児童相談所、検察が連携し、代表者による子どもへの聴き取りを始めている。仙台地検の指針はこうした流れを受けた先進的な対応で、各地検にも指針作成の動きが広がるか注目される。

### うどん県のイメージ崩れる？ 香川で児童虐待が過去最多に

産経新聞 2016年5月20日



#### 全国で人気のさぬきうどん

平成27年度の香川県内の児童虐待対応件数が前年度比4・5%増の760件となり、過去最多だったことが県のまとめで分かった。県は「児童虐待は非常に深刻な状況。社会全体で解決すべき大きな課題」として、虐待を受けたと思われる子供を見つけた時などの一報を呼びかけている。

児童虐待対応件数は香川県子ども女性相談センター（高松市）と県西部子ども相談センター（丸亀市）で対応した件数の集計。

虐待の種類別では心理的虐待が前年度比40件増の409件と最も多く、全体の54%を占めた。県は「子供の面前で行われるDVが増加したためと考えられる」としている。身体的虐待は4件減の219件、ネグレクト（育児放棄）が2件減の125件、性的虐待が1件減の7件だった。

虐待を受けた子供の年齢別では小学生以下が全体の80%に当たる611人（小学生279人、3歳～学齢前177人、3歳未満155人）となっている。

一方、主たる虐待者は実父が56件増の348件で最も多く、これまで最も多い割合を占めていた実母は35件減の306件だった。

香川県の児童虐待対応件数が過去最多になったことについて、浜田恵造知事は「深刻な状態。県の児童相談所で児童福祉司、児童心理司など専門職員が関係機関と連携して対応しているが、社会全体で解決していかなければならない重要な課題」との認識を示し、「児童虐待の未然防止、早期発見、早期対応に努めていく」と述べた。

子供が虐待を受けていると疑われる場合の連絡や相談は県子ども女性相談センター（(電) 087・862・8861）、県西部子ども相談センター（(電) 0877・24・



3173)のほか、市町の児童家庭相談窓口で受け付けている。

### ＜南風＞独りの少女と向き合っ

琉球新報 2016年5月21日

沖縄の子どもを取り巻く環境は依然として厳しい。敗戦から日本復帰まで沖縄は米軍統治下に置かれ、子育て環境にも大きく影響が及んでいる。長い間、放置されてきた子どもたちの困窮に地域の大人たちが寄り添い、取り組みが行われていることを嬉(うれ)しく思う。

15年前からずっと気になっている独りの少女がいる。育った家庭環境があまりにも複雑だったことを忘れることができない。

母親は働き者で昼も夜も身を粉にして働いていた。父親は定職がなく賭け事が好きで、お酒を毎日飲んでいるとのことだった。母親の仕事が夜勤で自宅に帰れずに子どもだけで過ごすこともあったと言う。少女との出会いは、幼稚園児で学童クラブに入所してきたことがきっかけだった。少女は無邪気で明るく、成績も良く、賢い子であった。

私が「ももやま子ども食堂」を始めるきっかけの一つでもある。少女は小学3年生まで学童で預かり、その後はクラブ活動に入るということで退所した。しかし、4年生から父親の暴力や暴言などの虐待が始まり、体中あざだらけだった。中学校に入るといじめに遭い、学校に行くことができなかったという。

誰にも相談できずに家出をし、家にも学校にも居場所がなく深夜徘徊(はいかい)するようになった。最後は児童相談所のお世話になり、児童自立支援施設で生活指導などを要する生徒になってしまった。「なぜ、誰も気付かなかったのか」。彼女の話、胸が痛み、涙があふれた。

「子どもは、さまざまな事情を背景にストレスや不安を言葉にして大人に伝えることができないため、注意深く見守り、子どもが発するSOSに気付いてあげることが大人の役割だ」と感じた今、彼女は夜の仕事から昼間の仕事に変わり、軌道修正を試みている。これからも彼女を見守り、支援を続けていきたい。

(比嘉道子、NPO法人ももやま子ども食堂前理事長)

### 認知症を撃退 予防体操「コグニサイズ」普及へ

日本海新聞 2016年5月21日

社会問題化している認知症対策の一環として、県立但馬長寿の郷(兵庫県養父市八鹿町国木)は、予防体操「コグニサイズ」の普及に乗り出す。本年度はリーダー養成講座を開き、指導者を育成する。兵庫県が講座を展開するのは初めて。但馬地域から新たな潮流をつくりだす考えだ。



ひもをはしご状に編んだ「コグニラダー」を使用し、頭と体の運動を同時に行うコグニサイズ(国立長寿医療研究センター提供)

コグニサイズとは「コグニション(認知)」と「エクササイズ(運動)」を掛け合わせた造語で、国立長寿医療研究センター(愛知県大府市)が考案した。頭を使いながら体を動かすことで脳の血流が活性化し、認知症発症の遅延や認知機能を改善する効果があるとされる。全国の介護

事業所や福祉施設、公民館などに広がっている。

体操はステップを踏んだり、しりとりをしたりしながら任意の数の倍数で手をたたくなど、計算と運動を組み合わせている。心拍数を図りながら運動強度を設定。レベルに応じたさまざまな体操があり、発展的に取り組めるのが特長だ。

但馬長寿の郷は「無意識にできるようでは効果が薄くなる。少し難度が高い体操に挑戦して間違えるぐらいがちょうど良く、仲間と失敗を笑い合いながら楽しめる」と話す。

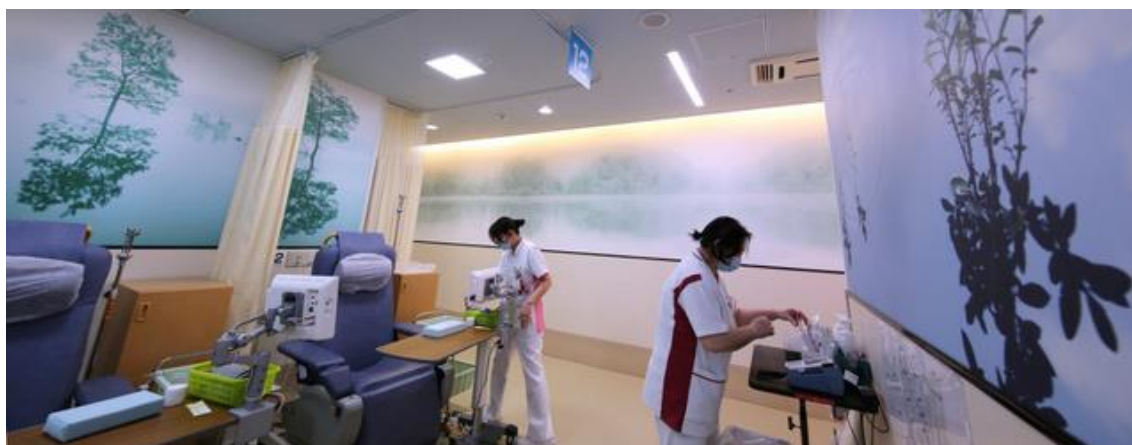
日本の高齢化率（65歳以上の割合）は2014年度で26%に達し、超高齢社会を迎えている。厚生労働省によると、高齢者の認知症有症率は約15%、認知症の前段階「軽度認知障害」の有症率は13%に上り、発症の未然防止や進行阻止が喫緊の課題となっている。

但馬地域の高齢化率は今年2月時点で34%。県全体の27%を上回る。但馬長寿の郷は、但馬を皮切りにコグニサイズを普及させようと講座を企画した。5～11月に全6回を開催。7月の3回目までは、同センター職員が指導に当たる。

参加を呼び掛けたところ、但馬地域内外の介護、福祉施設や自治体職員、自治会役員などから申し込みが殺到。3回目までは既に定員の50人を超過した。「関心の高さに驚いている。健康寿命を延ばす一助にしてほしい」と喜ぶ。

実践例や体操の効果を分析し、有用性を実証する考え。「但馬地域は健康への意識が高く、住民同士の距離が近い。娯楽性も高いので、継続性の確保も容易では」と普及に期待する。（福谷二月）

白い壁のイメージ一新、治療室を写真で演出 埼玉の病院 朝日新聞 2016年5月20日



高橋福生さんの写真「水園」が壁一面に飾られた化学療法室＝埼玉県草加市の草加市民病院、嶋田達也撮影

がんなどの治療で来院する患者の不安を和らげようと、埼玉県草加市の草加市立病院（高元俊彦院長）の化学療法室で写真による空間演出が始まった。

写真家の高橋福生（とみお）さんが妙高高原などの水辺で撮影し「水園」と題した作品で、鏡のような水面に木々や植物が映る幻想的な写真だ。部屋中の壁面いっぱい貼られており、治療を受けながら眺めることができる。

「事務室のような白い壁に囲まれた治療室を、患者を包み込むような空間に」と考えた高元院長が高橋さんの作品が掲載された雑誌を見て、協力を要請した。

高橋さんは「病気で悩む人たちに少しでも癒やしになれば」と話している。（嶋田達也）

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行